

## 教化の視点より見た真言教学について

吉 田 宏 哲

### はじめに

智山伝法院の機関誌『現代密教』の創刊にあたって、この雑誌の性格が問題になった。それは、(1)誰に読んでもらうか。(2)何を目的とするか。(3)執筆者は限定するのか。などである。

このうち、(1)誰に読んでもらうか、は読者の対象を本宗教師に限るか、それとも広く一般大衆まで拡げるか否かということである。伝法院の会議でこれは文句なく、本宗教師を対象とするということになった。もちろん、本宗教師を対象とするといっても、それは本誌の内容が普遍性を失うということではなく、むしろ本宗教師がすでに持っている事教二相にわたる知識、経験・技能を前提にし、これらの特殊性をいかに普遍的なものたらしめるかということを意味する。(2)で述べたことがそのまま本誌の目的を指示している。すなわち、本誌の目的は本宗教師が本宗教師として有している知識・技能等の特殊性をいかに普遍的なものたらしめるかについて、その内容・方法をアドバイスすること、これである。ここで普遍的なものたらしめるとは、檀信徒に本宗の本尊・教義・教師に対して信と信解とを起さしめ、それによってこの世界に密厳仏国を開顕せしめるということである。もちろん、そこには教師自らの起信

と自身における密厳仏国の開頭が果たされていなければならない。それゆえ、特殊なものゝの普遍化とは、まずさしあたって自身における特殊なものゝの普遍化を意味する。

(3)そこでつぎに本誌の執筆陣容であるが、上述のような読者対象・刊行目的からして執筆陣は一応、智山伝法院のスタッフに限定した。これは決して他を排除するという意味ではなく、必要に応じて宗団内部あるいは外部からの寄稿も掲載する。また、本誌の内容等に対する批判・助言・激励は是非とも必要である。いずれにしても、本誌が伝法院の年内活動とは違った意味で本宗教師の研鑽、教化のために新風を吹き込むことが出来れば幸甚である。

以上、『現代密教』発刊の目的等について述べたので、つぎにこのような目的のもとに筆者としてはいかなるものを書くべきかを考えた。そこで前に示した命題である「特殊なものゝの普遍化」ということと同人内使いこなし、まずは自己研修し、さらにつぎには檀信徒教化のために活用せられることが望まれる。もちろん、自己研修終了後、檀信徒教化が行われるというよりも、檀信徒教化の活動の最中に自己研修がなされるという形になろう。

### 一、教化にとつての教学の意味

現代の我々にとつて、弘法大師や興教大師の真言教学はすでに出来上ったものとして与えられている。そしてこれらの教学は変更のきかないハードな部分である。そこでこれらの教学を理解し、初学者に教育する部門が必要であり、これは大学教育や専修学院での教育にあたる。次にこれら初等教育（真言学の勉強にとつてはたとえば大正大学での勉強は初等教育といつてよい）に続いて、自坊での檀信徒教化の実践がある。ところが、この実践において弘法大師の教えがわかり易く説かれるといふことはまずない。ましてや興教大師の教えなどはまるで説かれることはない。

それは何故かという理由を考えてみると、そこにはおよそ次の三つの理由が考えられる。

(1) 弘法大師、興教大師の教学が難しいから。(2) これを易しく説いてくれる教師がいないから。あるいは易しい解説書がないから。(3) 弘法大師・興教大師の教えを人びとに説かなくても、日常の寺院生活には支障をきたさないから。

これらはいずれももっともな理由であるが、このような理由があるからといって、真言宗智山派の教師が弘法大師や興教大師の教えを人びとに説けないようでは情けない。勿論、法を説くだけで教化ではなく、寺域を荘厳し清浄にすることも、あるいは対社会的活動をすることも、あるいは勤行したり法事や葬式の儀式を執行したり、護摩を焚いたりすることも立派な教化活動である。また教化のための組織作りをしたり、教化資料の出版等の仕事にたずさわっていることも、教化活動の一翼を担う大事な仕事である。

しかし、教化目標を人びとの心の転換に置くとなると、仲々これらの行事だけによって人びとの心品の転昇は望むことができないと思う。

ところが、弘法大師や興教大師の教えの目的は「抜苦与楽」にあり、これはとりも直さず人びとの心の転換による。伽藍や寺院の行事でさえも、その場に臨んで心が安らぎを覚え、慰めを得、生きる力を取り戻すからこそ、それらの事柄に意味があるのである。これはこれで心の転換であると考えることができる。そしてこのような心の転換があるからこそ、人びとは寺院に集まり、かつ寺院を荘厳し、行事に参加することに喜びを見出しているのであると思う。そこでこのような心の転換を意識的・方法的に説いたものが、弘法大師の教学である。たとえば大師の『十住心論』はこのような心の転換のプロセスを十種にわけて、しかも極めて体系的にこの転換のプロセスが書かれている。

ただし、ここで考えなければならないことは、『十住心論』に説かれるような十段階の心の転換はあくまでも一つのサンプルであって、これがそのまま檀信徒各人の心の転換につながっているわけではないということである。ということは『十住心論』をマスターしなければ心の転換が出来ないというわけではないのであり、心の転換はむしろ寺

にお参りに来たり、住職との何げない会話の中で行われることもある。それは心というものはいつも動いているから、教化活動もその心の動きの中で行われなければならない、しかもそれぞれの人の心は皆違うし、一人の人の心さえその状況によって常に違っているという有様であるから、そのように多様で流動的な人びとの心の教化というのは並大ていの仕事ではないのである。

ここで、心の転換をはかるとか、心の教化をするとかいったが、いったいその転換の方向性は何かが反省されなければならない。実はこの教化の方向性ということにおいて教学というものが意味を持つてくるのである。つまり、教化、教化といっても、その教化とは坦信徒の心の転換であるかぎり、サンプルとしての教義をいくら詰めこんでもそれは知識としては頭に入るかも知れないが、心が転換して悩みが解消し、不安が取り除かれるということにはならないであろう。しかし、心の転換である限り、その転換には方向性があるはずであり、その方向性は最終的には無上正等正覚の方向に向いていくべきであろう。

そこでこの無上正等正覚への方向性ということにおいて、かのサンプルであったものがむしろこれではなくてはならない方向性を指示する規則として立ち現われるということができる。ここにおいて、教化にとつての教学の意味とは心の転換の方向性を指示する規則であるということが明らかになった。別のたとえでいえば、薬の処方箋あるいは旅人のための道標である。そしてこの処方箋によって薬を調合し、患者に与える医師の役割、あるいは道標をたよりに先達となって旅人を導く役割が本宗教師であるということになる。そしてその際、処方箋は患者の病状によって書かれるから、教師たるものは檀信徒の心の悩みや願いを正しく察知し、悩みを解消し願いをかなえるための処方箋を正しく書かなければならない。これはあたかも医師の診断と同じであり、相当な人生経験を積んだ教師でなくては出来ないことである。勿論、人生経験を積んだだけでは教師にはなれないのであって、医師が診断と同時にその診断に

じた処方方が教師の場合にも必要であり、この処方にあたるものが教学と教学の活用である。

以上の如くが、教化における教学の意味である。これによっても明らかな如く、教学はそれだけで意味があるのでなく、教化のためにこそ、ということとは自利・利他あるいは自覚・覚他のためにこそ意味をもち、また他方、教化はその方向性を正しく指示するものとして教学の裏づけが必要なのである。ここで前に、弘法大師や興教大師の教学は特殊であり、これを普遍化することが教化であると述べたことについて補足説明をしておく。すなわち、前に教学が特殊であるといったのは一般檀信徒を普遍と見てそうだったのであるが、これはむしろ量的・外面的な規定であり、質的・内容的に見れば教学こそ普遍的であり、一般檀信徒はむしろ個別である。そして普遍的であるからこそ真理であり、人びとに遍く樂を与え一切の苦を抜くことができる。

そこで次に真言教学が普遍的でありかつ真理であるという方面について考察を廻らしてみよう。

## 二、真言教学の普遍的眞理性について

教化という視点より見た真言教学というテーマについて語るに際して、この章のような表題について論ずることは必ずしも適當ではないと思う。何故なら、このようなテーマはそれ自体難解であるし、これについて論ずるためにはより一層難解な範疇や概念を使用しなければならぬからである。

しかし、我々が真言宗の教師として自己研修と布教とにたずさわっているのは、実に我々自身がその宗とする真言教学の眞理性を確信しているからであり、その確信は正々堂々と内外に表明されてこそ、普遍的にもなりまたその眞理性も証明せられることになる筈である。そのような意味ではこの表題にかかげたことが全面的に表明されなければならないと思うし、またその用意もある。

ただ、ここではそのような全面展開の時間的余裕がないので、その要点のみをここに指摘するにとどめたい。

1、真言密教は諸仏の自内証法門である。

2、法身大日如来の直説である。

3、三密瑜伽行による即身成仏の径路である。

4、諸思想・諸宗教を批判綜合する論理を有する。（『秘密曼荼羅法門』）

5、声字実相・如実知自心を説く。

これらは真言宗教師なら誰でも知っていることであると思うのでここで詳説はしない。ただ、5の声字実相と如実知自心とを並べたのは、声字実相は真理の普遍性あるいは開放性を示し、如実知自心は真理の主体性を示すからである。このように普遍性と主体性とは何故一緒になるかは不思議というほかないが、これは1の真言密教は諸仏の自内証法門であるということと、2の法身大日如来の直説であるということとの関係と同一の事態を指す。そしてこの二つの矛盾するものが一体化するのが3でいうところの三密瑜伽行であり、これによって即身成仏するというのが真言密教の教義なのである。またこの即身成仏によって4の諸思想・諸宗教の批判的綜合が成し遂げられる根拠が与えられることは言うまでもない。

### 三、形成されたものとしての真言数学

弘法大師の真言数学は二重の意味で形成されたものである。すなわちその一は真言数学は歴史的な背景を持っているということであり、その二は弘法大師御自身の思想形成として成立したということである。実はこのような真言数学形成の二重性のうちに、前述の普遍性と主体性という二重の契機が入りこんでくる原因があると思われる。

そしてこのような弘法大師教学形成の二重性は、我々教師が大師教学を学ぶに際して、是非とも考慮しなければならない二重性であるといえる。ただその場合に、歴史的な形成過程としての側面は、客観的に与えられているから、ある程度まで了解可能な領域である。しかし、教学の主體的な把握となると、これは非常に難しい。実はこの教学の主體的把握がすべての真言教師に課せられている課題であり、あるいは仏教教団成立以来、僧侶が追求してきた課題なのである。

またこの課題の追求の成果が、仏教思想史を成立せしめたのであり、これはいってみれば法の体系の成立である。

弘法大師の教学はこのような法の体系の大師自身による体解とその再構成である。ここでは大師御自身も与えられた法の体系をいかに自らのものとするかという苦闘をなさっており、その苦闘の究極が中国渡航にはかなならなかった。そして唐の長安・青龍寺において授けられた兩部の大法が大師の苦闘の最終的な解決であり、成果だったのである。

それでは中国で得られた成果は帰国後ただちに表明されたかという点、そうではない。たとえば、大師の最も完成された法の体系である『秘密曼荼羅十住心論』は帰国後二十年以上も経ってから発表せられている。弘法大師五十六才の時の作といわれている。

そこで我々真言教師が宗祖大師の『十住心論』によって自己の信心と大悟とを得んとするには如何したらよいか。答えは自ら明らかであって、大師と同じことあるいはそれ以上のことをしなければならぬといえる。

しかし実際はそんなことは出来ないし、そのために大師も三密瑜伽による即身成仏道という易行道を説かれた。また興教大師も真言念仏なる成仏道を説かれた。それゆえ、真言行者はその機に応じて三密あるいは一密の真言行を修し、また人に薦めて信行せしめることが肝要である。

他方、弘法大師・興教大師と同じ悟境に到らんと欲うならば、身命を賭して四種心を学ばなければならない。すなわち、その四種心とは『三昧耶戒序』に説く信心・大悲心・勝義心・大菩提心である。このうち、教学にかかわる心は勝義心であるが、この勝義心とは捨劣得勝の心といわれ、無上正尊正覚に至るまでいかなる心のあり方にもとどまらない心の意味である。従ってこの心は無自性心とも無分別心ともいわれる。

ただここで注意しなければならないことは、無自性心とか無分別心とかいう心は、自性が無い心や分別が無い心というよりも、自性にとらわれない、あるいは分別にとらわれない心という意味で考えられなければならないということである。この場合自性や分別にとらわれないとは、自性や分別が無いのではなく、それらは依然として存するが、しかもそれらに捉われないことがないという意味である。そんなことが一体出来るのかと思うかも知れないが、それは自性や分別が幻や夢の如くあると観察することによって可能である。何故なら、幻や夢は有りかつ無いのであるから、実体が無いということによってはこれに捉われないことがなく、幻として有ることによっては衆生の救済が捨てられることがない。これによって不著生死・不住涅槃という大乘仏教菩薩の立場が確立し、また、即不思議幻の立場に立つ真言密教も遮情と表徳という違いこそあれ、この如幻法門の系列の上にあるのだということが出来る。

弘法大師において形成されたものとしての真言教学は、弘法大師所学の経律論であり、それら三蔵のうちで重要なものは、『大日経』『大日経疏』『金剛頂経』『菩提心論』『釈摩訶衍論』等である。しかるにこれらの経論や疏はそれ以前の仏教思想をその背景としてっており、たとえば『大日経』住心品中には、インド大乘仏教の三大潮流である。中観・唯識・如来蔵という思想の系統と、部派仏教の思想、さらには『大日経』成立当時のインドの諸思想、諸信仰、そして世間の人々の心の様々なあり方が殆んど全て網羅されている。

それゆえ、『大日経』住心品そのものが、すでに形成された思想であり、これが書かれた時には大師の場合と同様



な二つの契機が存在していたのである。勿論、『大日経』は大毘盧遮那如来が教主であり説主であるから、それ以前の思想・宗教とかそれ以後の経典とかいうのは意味をなさないかも知れない。しかしそれは教義学上の議論であって、実際には『大日経』住心品中にある思想は大乗仏教の中観・唯識等であり、これらが批判的に総合されて説かれているのである。したがって『大日経』住心品は中観仏教の論書でもなければ、唯識仏教の系列に属する経典でもない。

そしてそれゆえに、『大日経』住心品はその独自の価値を有し、弘法大師もその独自の価値に目をつけられてそれを『十住心論』の主題とされたのである。

しかし、『大日経』住心品の独自の価値を認めるということ、これを形成している諸思想を個々に研究するということは相容れないものではない。むしろこれらの諸思想をその成立の原点において研究し、その成立の背景とその意味とを把握することによって、我々は『大日経』住心品そのものをより正しく、より深く理解することができるであろう。

そして更にいえば、小乗といい、大乘というも、結局、これらの教えはその原点を釈尊仏教に置いているのである。したがって小乗や大乘の思想を探ることはさらに釈尊所説の仏教へと帰ることであり、あるいは釈尊仏教と小乗・大乘の異同を究明することになる。

実をいえば、『大日経』住心品はこのような操作をすで行っているのである。その意味では我々は阿含経や俱舍論や般若経等を研究しなくても『大日経』住心品とその註釈書である『大日経住心品疏』によって、歴史的に形成された諸思想を知ることができる。

しかし、いずれにしても、所与の真言教学の研究というものは、その背景が千年以上もさかのぼって成立している

思想であるという性質上、非常に難しい研究であることは間違いない。

#### 四、教化という視点から見た真言教学

これまで教化にとつての真言教学の意味などについて論じてきた。これを要約すると、

(1)真言教学では、教化に応じたあらゆる教学があるとしていること。(2)それぞれの教化はより深い悟りあるいは安らぎの段階を目指していること。(3)即身成仏の実現が教化の最終目標であること。(4)その方法として三密瑜伽行が説かれていること。(5)真言教化者に対しては四種心の実習が薦められていること。(6)即不思議幻が真言教化において観想さるべきこと、などである。

そこで次に、教化という視点から見た真言教学ということで、教師がいったい何をやったらよいかという提言をしておきたい。この場合、勤行や廻向、祈願など普遍に行われている儀式や、教師研修などの自己研修はすべて除外する。そうではなくて、ここでいう教学と関係した教化とは、とくに言葉による檀信徒の心の転換を目指す教化である。これに三種類ある。

- (1) 日常的会話による教化。
- (2) 廻向や祈願などの儀式の際行われる説法。
- (3) 定期的な勉強会による教化。

このうち、(1)には僧侶以外の職業についている場合や社会奉仕活動に従事している場合も含まれる。これらの場面では仏教の教えが直接説かれることはないが、しかし仏教的生き方、密教的生き方はいかなるものが常に問われているとしなければならない。

(2)は積極的に仏教や密教について説く機会である。ここで注意すべきことは(1)(2)(3)ともすべて話すことあるいは会話・問答が主たる教化のメディアであるということである。もちろん、補助的な手段として書かれたもの(揭示法語、寺だより、仏教聖典など)が用いられなければならない。しかし、書かれたものだけでは読まれないこともあるし、理解されないこともある。したがって心の転換という教化の機会は限定されてしまう。それに対して話しかけるということは心を開かせる最も近い道なのである。とくに(2)の場合、たとえば通夜の枕経だけでも功德ははかり知れない筈であるが、遺族や参会者の悲しみが読経だけによって癒されることは殆んどないであろう。若し本当に癒されるとすれば、それはその経の意味を少しでもわかった場合の話である。それではどうしたらお経の意味が一般檀信徒にわかるのか。それは教師がこれを教える以外にはない。そして教えるのは言葉によるから、通夜などの説法が必要なのである。今更、そんなことは出来ないという教師もいるが、教化にとっての説法の重要性という意味からいえば、たとえ始めは訥々たる話であっても、人生の無常と仏の救いについて少しでも語るべきではなからうか。

(3)廻向や祈願という特別の機会における説法は、人びとがそのような心情にあるときだから、比較的短かくまた話題をしぼって語ることができる。しかし、仏教の難しい話になると仲々短い時間には出来ない。そこで、月に2回とか4回とか定期的に仏教思想を勉強する会を持つことが要請される。そしてこのような会においてこそはじめて真言教学が檀信徒にとって意味をもってくるのである。しかし、最初から大上段に振りかぶって真言教学を説こうとしても無理というものである。すぐに皆来なくなってしまふであろう。そこでテキストは仏教入門書とか仏教聖典を選び、檀信徒の誰かに読んでもらって、住職(教師)が例などを挙げてわかり易く解説をする。場合によっては、そのような輪読会と一緒に坐禅や阿字観などの実習も行ふ。あるいは写経会、お茶会などと一緒に行うことも工夫される  
とよい。

いづれにしても、教化という視点から見た教学とは、これがその教学だといって示されるものではなく、教師各人が言葉によって語ることによって人々の間に弘めていく極めて多様な生き生きとしたものであると思う。そして教学が生命を吹き返すか否かはそれぞれの真言教師の生命の中においてのみであり、あるいはさらに教師の生命から檀信徒の生命へと伝えられることによってのみなされるのであることが銘記されなければならない。